

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑬

安政南海地震について 年11月5日の夕七ツ時(午は、津波により土佐で大きな被害があったことは知られているが、隣接する伊予の宇和海沿岸部の被害はほとんどなかったのであろうか。今回紹介するのは、そのエリ

アに位置する外海浦(愛南町の南側沿岸部)の被害状況に仮小屋を建てて、昼夜

安政南海地震の被害伝える文書

家3割被災学び備えて

況が記された記録(以下、「諸願書一卷」と略称)である。

冒頭には、外海浦における地震発生時の状況が記されている。地震の発生時刻は、嘉永7(1854)

の寒さをしのぎ、村人は神仏に祈ることしかできなかった。毎日昼夜絶えず余震が続き、終わりがみえないので、各自の判断で帰宅することとなり、居宅の修繕用に近村から提

供された真縄・筵(むしろ)・蓆(こもだわら)が配られている。それらで応急措置をして自宅に帰ったが、その後も大きな地震が起こるといふ風評もあり、再び自宅を離れて高いところで避難生活を送る者も多かった。発災直後の村人の気持ちを「昼夜心の不安事」と表現している。

「諸願書一卷」で注目されるのは、冒頭の文章に続き、外海浦が藩に提出した被害報告が筆写されていることである。この報告に

「諸願書一卷」で注目されるのは、冒頭の文章に続き、外海浦が藩に提出した被害報告が筆写されていることである。この報告に

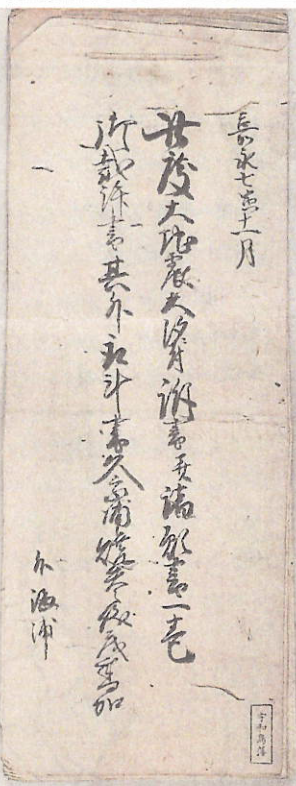
この3月に東日本大震災から14年になる。古文書から学ぶことで、近いうちに起きるとされる南海トラフ巨大地震に備えたい。

(学芸課長・井上淳)



「諸願書一卷」は特別展「宇和海のくらしと景観」で4月6日まで展示中。

〈随時掲載します〉



外海浦の地震記録「此度大地震大汐二付訴書并諸願書一卷」
一県歴史文化博物館蔵